

---

# T・C！

夏木 岳

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

T・C!

### 【Zコード】

Z3448G

### 【作者名】

夏木 岳

### 【あらすじ】

「ねえねえ、キラー・クイーンってしてる?」「うかつに噂を信じると、痛い目にあうものですね……

## 始まり始まり（前書き）

この作品はジャンルシャッフル企画に参加しています。「ジャンルシャッフル企画作品」と検索すると、企画参加作者様の作品を見るることができます。

## 始まり始まり

「つむりの高校にさ、「キラー・クイーン」ってのがこるらしこよ」

入学早々、片鞠高校におかしな噂が流れておりました。キラー・クイーン。彼女は一体何者なのでしょう。葉瀬集中学出身で、でもそんな中学校は存在していないとか。クイーンと言いながらも本当は男だと。実は外国の殺し屋キラーだと。男を殺し続けるクイーンだとか。噂に様々なフカヒレがくつき過ぎて、実態を憶測することはどうでも困難。

それでも噂は噂。風化するのも早いもので、気が付けば話に出来人は数えるほどになりました。

それでもそれでも、彼は知りたかったのです。おおつじけん大辻健くんは知りたかったのです。クイーンが美少女というところだけを信じて。

「トライジック・コメディ！」

「上記、つてわけ。とりあえず今日は教室という教室を見てまわる予定だ」

「前置参考まくあくつてわけか。でも今更だよな針井はりい」

「だよな間開まあく。今更キラー・クイーンなんてネタか何かか？」

大辻くんは放課後、級友の針井くんと間開くんにキラー・クイーン搜索を持ち出しました。でも一人はとても乗り気じやありません。逆にDSで対戦ゲームには夢中です。

「明日マック奢ろう。それでどうだ？」

ちらつと財布に相談してみると、駄菓子屋を手ぶらで帰るほどお金がありました。あとカードにバイトの貯金があるはずです。

「マックってパソコンだろ？ そんな金あるのか？」

「吉マクドナル野屋だよ」

「マクドって言え」

「マックとマクドでは意味が違つそうです。味も変わるものです。針井くんと間開くんはどうする？ と迷つてているようす。一ゲーム終えてまた針井くんはどうすると聞き、間開くんはどうすると聞きました。さらに一ゲーム終えて針井くんは以下同文と言いました。」

「Dの疲れだし、いつちよやるか」

「そうだね」

夕日が街を包む頃、一人はやつと動く気になりました。主役であるはずの大辻くんが見当たりません。夢中になつてゐるうちに既に行つてしまつたようです。一時間近くどつすると言い続けていたのですから当然でしょうか。

何はともあれ、搜索開始。まず隣の教室とかは無視。同階の社会科準備室を覗きました。名前の通り社会科の先生が作業する部屋です。誰も居ないようです。地球儀に大きな壁掛けの日本地図。雑多としている仕事場ですが、机に丁寧に書かれたルーズリーフがありました。それだけが綺麗に置いてあるので目立つのも当然です。

「おい間開、見てみる」

「これは日本史の中期テストじゃないか！」

「一人は先生が戻つて来やしないかとドキドキしながらも、テスト範囲を書き写しました。一人はこの日、いけないひとになつたのです。曰く不良と言つやつです。

一方その頃大辻くんは、部活棟の方にいました。この学校の特徴の一つ、旧校舎を建て替えた広くて大きな部室のみの建物。それが部室棟です。二階では美しいプラスバンドが、地下の元ボイラー室からはギターの轟音と慎ましやかに低音が聞こえます。大辻くんはまず一通り見ることにしました。扉の名札を頼りに、野球、サッカー、バスケ……様々な部活名が確認できます。

「映画研究会？」

みしらぬ部活にぶつかりました。たしか新入生歓迎会では、そんな部はなかつたはず。暗幕に遮られた教室を見て、ふと疑問に思いました。何か臭う。大辻くんは時計よりも静かに扉を開けました。遮光が徹底してあり、光が入つて気付かれることはありません。外の暗幕を通り、ちらりと中の暗幕を捲ると、女の子がぽつんと一人涙をボロボロとこぼしていました。

「これぞ究極の愛よお」

内容もタイトルもわからない、外国語で白黒映画ということしか見てとれない。謎に謎々していると、突然オカンが走りました。ぞくりとして振り向くと、細いキツネ目の中年男が。思わず叫びそうになりましたが口を塞がれ、教室の外へ引きずり出されました。

「いけないねえ一年生君。部員でもないのに勝手に入つて」

上履のカラーは青。どうやら三年生のようです。ちなみに一年は赤、一年は緑です。大辻くんは謝るうとしましたが、いや謝らなくていいと牽制され、持っていた紙コップを渡されました。中身は珈琲牛乳のようです。

「まあ飲みなよ一年生君」

「口リと穏やかな笑顔。どうやら悪い人ではないようです。

「ありがとうございます、先輩」

大辻くんは紙コップに口つけました。

「君、クラスと名前は？ 僕は久米忠ノ介」

「一年三組、大辻健ツス」

久米先輩は三組があ、と何かくすくす笑いました。

「三組なら由紀様の担任だつたね。君、うまくやれてるかい」

たしかに三組は勇田由紀先生だ。オトナの魅力溢れる29才既婚。特に厳しいところもなく、かといって甘いわけじゃない、優しい先生。少なくとも大辻くんはそんな印象を持っています。

「別になんていうか、普通ですよ」

そうかそうかと久米先輩は意味深な笑みを浮かべました。

「いや何ね。彼女の女王様つぶりはまだ……」

女王！ キラー・クイーンと何か関係があるのではないでしょ

うか。

と、そこでガラツと映研の扉が開き、目の泣き腫らした女の子が出てきました。彼女は久米先輩と目が合つて、目で何かを受け取りました。

「くーちゃん、その子入部希望？」

「まだだよ。部についても話していない」

可愛らしい金髪の……金髪は校則で良かつたのでしょうか。久米先輩をくーちゃんと呼ぶ辺り親しい間柄のようです。

「私、高槻二一ナ。今日はもう帰るんだけど、今度映研について聞いてね」

にこっと笑い、ギュッと大辻くんの手をとりました。約束だよ、と念を押してまたスマイル。そしてじゃあねと二一ナちゃんは走つて帰つていきました。彼女が見えなくなつた後、久米先輩は後片付けだと言って教室へ。大辻くんはギュッの感触に立ち尽くしました。

「エーと。何をするんだっけ」

そう。キラー・クイーンを探すこと。女王様と呼ばれた勇田由紀先生について聞きたいところ。でも彼の少年の心は二一ナちゃんでいっぱいです。すっかり忘れて帰つてしましました。

「おい間開、見ろ！ 生物？ の試験範囲だ！」

大辻くんがお花畠にいるころ、間開くんと針井くんはテスト問題をコンプリートしていました。

「しかし俺ら悪いな」

「最低つてのはよくわかる。だがな針井、据膳食わぬは……据膳食わねど……高楊枝と言うじやねえか」

生徒手帳にびつしり書かれたテスト範囲に、ついニヤリとしてしまう一人。高笑いしたいのを抑えて、よしこそそりと去りました。高校生活をおもしろおかしく過ごすためにばれてはいけないのです。

ばれたら首がハリウッド映画みたいに吹き飛ぶに違いありません。  
そななからなくとも“清雄士道”行きになるでしょう。清雄士道とは  
眞の生活指導部、教育理念は清く正しく士道に殉じ……曖昧なので  
割愛。とにかく危ないとこらなのです。というわけで黒い一人はこ  
つそりと理科室を抜け出しました。

暗転しまして舞台は自宅、一人の悩める男の子がいました。彼は  
大辻健くん。高槻一ーナちゃんの顔を浮かべると胸がどうにかなつ  
てしまふのです。出会いは一時間も経たない過去。でもこの胸のモ  
ヤモヤは恋病なのかお昼のアンパンなのかはわからないでいました。  
つづく。

## 見つけた見つけた

それは良く晴れた朝でした。じりりと目覚時計が鳴り響いて、布団がもそりと動きます。緩やかな動きで目覚時計を止め、スロウに起き上がる、緩慢な動作でベッドから出ました。

彼女は部屋に日を取り入れ、ぐぐっとのびました。眩しい光に少し目が眩むけど、眠気はぱぱっとれました。

そのまま一階の自室を出て居間へ。階段を下ると、ベーゴンと珈琲がおこしそうにふわりとにおこました。

「おはよう、愛梨佳」

「おはようござります、菊子お姉さま」

食卓につくと、一度トーストが焼き上がったようです。菊子と呼ばれたセクシーな女性はトーストを一枚皿に移し、愛梨佳といつ可愛らしい女の子の前に出しました。

きつね色に焼き目のはいったトースト。純粋な黄色のスクランブルエッグに、こんがり赤色ベーコン、しゃきしゃき緑色のレタス。温かいミルクも添えて。

「いただきます」

渕藤家から代わりまして大辻家。両親は朝がとても早いので既にいません。

大辻くんはがばっと起き上がり、うわっと部屋を飛び出ました。いそいで顔を洗って歯を……美しくないので省略。穏やかなやさしい朝じやないのでとにかく省略。

省略へ学校に着きました。

「なあ間開。DSつて何の略だ？」

「でら凄い。じゃないか？」

「おお、そうだったのか！」

既に学級の皆は教室にいました。HR前の談笑中です。HRとは

もちろんホームルームのことです。ホームランでもハードロックでもありません。

大辻くんは挨拶を済まし、間開くんと針井くんにキラー・クイーン検査のことを話しました。

「そうそう、昨日先輩に聞いたんだけど、担任の由紀ちゃんがキラ・クイーンかもしない」

昨日の久米先輩の言葉によるば、彼女は女王様だそうです。キラ・クイーンと女王様。何かおられます。

「じゃあ本人に聞こう」

「そのとおり、それがいい、そうしよう」

針井くんと間開くんはストレートに攻めるタイプでした。

H.R.が終わり、三人は由紀先生が職員室へ戻っていくのを引き止めました。先生はキラー・クイーンですか？ と何の脈絡も無く直球を投げました。キラー・クイーンがどんなものなのかも知らないのに、いい度胸です。先生は少し戸惑つて、わからないと答えました。

「でもでも、女王様は知らないけどお嬢様なら知ってるよ」

「じょおう」と「おじょう」何か関係があるのでしょうか。発音的には似ていますが、とりあえずこれしかヒントが無いのだから従うしかありません。三人はお嬢様のことについて聞きました。

さて、放課後です。今日は三人揃つて動きました。いざ部活棟へ。

「でもよ、本当にそんな部活あるんかな」

その部活はまだ同好会ですが約七名所属しているといいます。二年生が一人、あとは一年生。そして部員全員が月ヶ丘中学卒業という謎の部活です。名前はまだ出し惜します。

浪漫探求会、U.M.A研、革新俱楽部……奥へ進むに連れて怪しく、また雰囲気も変わつてきました。強い敵とか出そうです。

「……」

通路の先の角に誰かいる。影に気付いた間開くんは針井くんの手

を小さくつづきました。そしてまた針井くんも大辻くんの背中をつまみました。ぴたり、と立ち止まり三人。目線は泳がせず、真っ直ぐをみています。でもこの不思議で不気味な空気は、今すぐにでも走り出したいくらいです。

おや。影が姿を表しました。歩いて前を横切っています。ですが全身真っ黒です。向こうが薄暗いのもありますが、本当に顔も含めて全身真っ黒だつたのです。大辻くんはその姿にピンときました。指名手配犯ではないけれどやつです。きっとキラー・クイーンのです。

「針井、間開、キラー・クイーンだ！」

「なんでわかるんだ？」

「そりやあ黒塗り野郎は犯人つて決まつてんじゃねえか。名探偵口ナン君知らねえのか」

それでは実は犯人ではないという人は白塗りなのでしょうか。なんだかよくわからぬ理屈ですが、とりあえず走つて捕まえてみるようです。しかし、黒塗りはすぐに通り過ぎてしましました。

「ござ角に差し掛かる。その時、がらりと教室の扉が開き、女の子が出てきました。

「高槻先輩！」

眼前に立ち塞がるのは、金髪つ子の二ーナちゃんでした。

「あらこんにちは。大辻くん。お友達さんも」

ある意味やつかいな相手です。大辻くんにとつては新・憧れの先輩なのですから。キラー・クイーンを追いたいけれども、お話をしたい。

「大辻くん。二ーナお話があるんだ。来てくれるよね」

「大辻、キラー・クイーンは田と鼻の先だ」

葛藤します。恋と好奇、どちらをとるのか。大辻くんは一人、二つはとれません。

「大辻くんは二ーナを偉ぶつて信じてる」

なんてくすぐつた言葉でしょう。

「田を覚ませ大辻。死んでいった者たちの為にも、俺たちはやらな  
きやいけないんだ」

いつたい誰が死んだというのでしょつか。物騒な話です。

「大辻くん。来て」

またギコツと手を握れば決め手になつたかもしません。

「大辻。あの日の般老心経を忘れたか！」

そんな話を書いた覚えがありません。仏葬な話です。

「俺はキラー……」

クイーンを。と言いかけました。誰も死んでないのに心が動いた  
ようです。多分フレーズに弱いタイプなのでしょう。

しかし、二一ナちゃんは突然言い出しました。

「大辻くん。昨日、私の珈琲牛乳飲んだよね  
なんでしょうか。私の珈琲牛乳。

「ま、まさか」

昨日久米先輩にもらつたものが思い浮かびました。そしてハツと  
氣付いたのです。この戦いに勝ち目はないことに。大辻くんは昨日

「二一ナちゃんがお金を出した」珈琲牛乳を飲んだのです。

「女の子がお茶代出したのに、少しも付き合つてくれないの？」

針井くんと間開くんが目を伏せました。やくざ屋さんと田が合つ  
たときくらい素早く。

「じゃあ行きましょう」

その時、大辻くんはドナドナの歌を聞いたそうです。

針井くんと間開くん。一人になつてしましました。

「とりあえず黒塗追おうぜ」

continueしまして。

針井くんと間開くんは一人、キラー・クイーンを追い、やつが消えていった階段を上がりました。一階に上るとすぐに「錦将会立花組」と書かれた部がありましたが、まるで見えなかつたように足元にスルーしました。

一階の端まで一本道。二階は誰も使っていないはずなので、ここにいるのでしょうか。少しづつ進んでいくと、「あの部」を見つきました。

「これ、先生が言つてた部じゃ……」

「ああ。どうもこおうな」

キラー・クイーンの消えていった二階。そして今日の田標だった部「ネガティ部」

一人はここが「ゴールなんだと感じました。

「間開、入るぞ」

恐る恐る扉に手を伸ばすと、突然勢いよく開き、男の子が飛び出してきました。

「あつ！」

つと言つ間に針井くんにぶつかりました。男の子は小さく、転んでしまい、体重のある針井くんはびくともしませんでした。びくともしないですがびっくりしました。ボタボタ、と赤いものが針井くんのお腹から垂れてきたのですから……

「ハリイイイイイ！」

閑話、映研。大辻くんは映画を見ていました。二一ナちゃんと久米先輩に洗脳されそうなほど説明を受けたあと、流れのようにシニアの前に座られたのです。

さて針井くんはどうなったのでしょうか。男の子にぶつかった途端に赤い赤いものが流れてきたのですが、実はただの染料だつたそうです。ネガティ部とは、写真を意味するネガとお茶を意味するティーからなつていて、衣服の製作などもしているそうです。制服が真っ赤に染まつた針井くんはなにやら素敵なスーツを着せられました。

「ごめんなさいね、うちの子が迷惑かけて」

この方が部長でしょうか。丁寧な言葉使いで謝っています。しかしながらという格好でしあうか。深紅のドレスを身にまとっています。

「貴人、なつき、二人にケーキでも食べさせてあげて」

ドレスの子は一年生部員一人に指示しました。彼女は偉そうともとれそうですが、むしろ気高いようでした。

「私は渦藤愛梨佳。君にぶつかつたのが蜂須賀修次で、ケーキを運んだのが草間貴人と飾磨なつき。部長の家侘千代子は今席を外しているの」

「一年二組、針井と間開」

「あら、君たちがそうなの」

愛梨佳ちゃんは一つのアルバムを取り出すると、二人に渡しました。それにはいろんな写真があり、ネガティ部員全員が個性的で素敵な服を着て写つておりました。女の子はどれもすごくかわいいし、男の子はどれもクールです。どの服も高そうで、細かく縫つてあります。すべてネガティ部の作品なのでしょうか。

「二、これは！ 間開！」

そしてアルバムの最後にデザイナーのサインがあり、それに気付いたのです。それには日向洋子、高井草壁、ザ・ブーツ、マキスター、世界最高峰超美人ドレッサーなつき、そしてキラー・クイーン。

「誰がキラー・クイーンかは言わないけれど。これで満足したかし

ら

日が暮れて、あるファミレス。

「しかしキラー・クイーンがあんなに簡単に見つかるとはな」

「誰かはわからんかつたけどな」

「いや、十分じゃないか……おお、大辻が来た」

「人はキラー・クイーンを発見したのと、かわいい子がいっぽいいたことを話しました。

「俺は……」

この話の主人公のくせに一番大事なところに立ち会えず、さらにはケーキも食べれず。宗教じみた映研勧誘をずっと受けで出番も無くなり、「ローマの休日出勤を白黒字幕なしで見せられて……」

さりにさりに、実は二ーナちゃんと久米先輩が付き合つててることも知つてしまつたのです。

次の日。大辻くんは一応ネガティ部へ向かいました。紅茶の香り漂う素敵な空間でした。

「昨日いなかつた人ですね。私は綾瀬万輝。まだみんな来てないから、ゆっくり待つて下さい」

可愛らしい小さな子です。彼女に接待されながら少しうると、部員が一人入つてきました。

「アリちゃん、昨日来なかつた子来てるよ

すすす、すごい可愛い子がきました。むしろ美しいです。なんとたとえましようか。

「私は渦藤愛梨佳。要件はこれでしきう?」

針井くんたちと同じく、アルバムを渡しました。キラー・クイーンがいることはわかりましたが、もうなんだかどうでもいいようです。むしろ愛梨佳ちゃんのほうが気になります。まったく惚れっぽい性格ですね。

「お、俺は大辻健！ よろしく！」

不思議なフレッシュヤーにどもりながらも、大辻くんは愛梨佳ちゃんと会話することができました。

五時を回ると、万輝ちゃんは習い事だそうで帰っていました。  
今日は部員がほかにいません

。つまり愛梨佳ちゃんと大辻くん、一人きりです。

「あ、あのぞ」

日が暮れて、あるファミレス。デジャヴ。

「大辻の奴遅いな。電話してみようぜ」

「ふふふ、ふるる。大辻くん出ません。何コールしても出ないので、  
切ろうとしましたその時。通話状態になりました。

「おう大辻。どうしたんだ？ まさかまだネガティ部か？」

「彼女はキラー・クイーン」

「え！ なんだって！」

「俺は一二九人目……」

「おい大辻、大辻！」

ふつつ。意味深な言葉を残し、電話は切れました。その日はそれ  
以上繋がらせませんでした。

次の日、大辻くんは学校を休みました。何があつたかは、本人が  
多くを語らなかつたためにわかりませんでした。しかし、ひとつだけ。  
なんとなくわかつたことがありました。

彼はあの日、誰かに告白したようなのです。

キラー・クイーンの噂には真実があつたのでした。

fin

## お終いお終い（後書き）

さて、つい完結。IJのお話は長くなつたうな連載作品「トライジカメーテイエ」の番外的作品となりました。トライジカはそのうち田の田を見  
るでしょう。コメディは難しいものですね。しみじみ思いました。

おまけ。

大辻くん。そのとき勉強してたものからできた名前。大津事件。な  
んだか重たい由来。

針井くん＆間開くん。映画「ホームアローン」から拝借。あの子可  
愛いよね。いや可愛かつたよね……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3448g/>

---

T・C！

2010年10月8日15時35分発行